

林野庁長官賞

地域材の総合供給基地化

加工流通施設を整備村内林業の基幹産業へ

龍神林業開発会議 委員長 松本 健

□事業体の構成

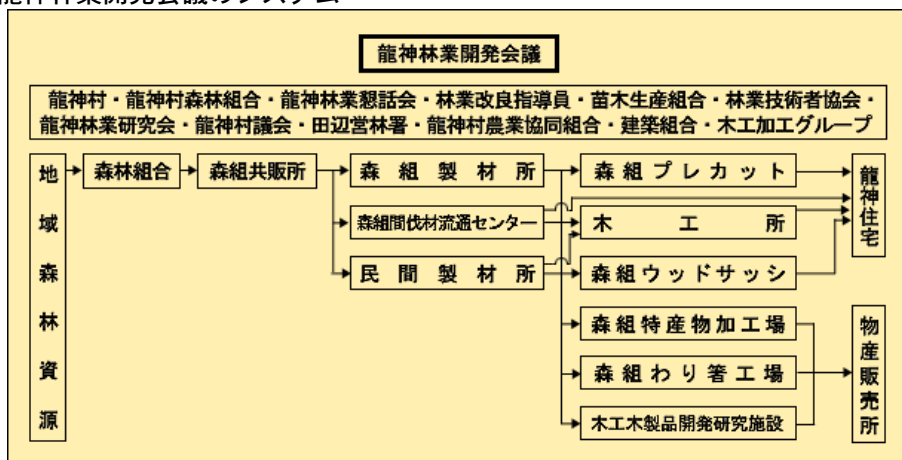
龍神村 龍神村森林組合 龍神林業懇話会 林業改良指導員（龍神駐在）、苗木生産組合 林業技術者協会 龍神林業研究会 龍神村議会 田辺営林署（龍神担当区） 龍神村農業協同組合 建築組合 木材加工グループ

〒645-04 和歌山県日高郡龍神村大字西33 龍神村役場林業課内

TEL0739-78-0111



□龍神林業開発会議のシステム



苗木づくりから住宅まで

村面積2万5,513haの内森林面積は2万4,299ha、林野率95%となっている。民有林2万2,754haの内人工林は1万6,110haで人工林率71%と高い。国有林は1,545haと6%を占めているに過ぎない。

龍神村における林業の歴史は古く、およそ200年前には既に人工造林が行われていたという。明治の頃には、ほとんどの村民が山林を所有していたが、大正から昭和の初期にかけての不況時に多くの山林が田辺や御坊の商人、木材業者の手に渡っていった。

昭和20年代までの林業経営は、粗放な施業が多く、また木材の搬出は人力と流送に頼っていたが、28年の日高川大水害以降、道路整備が進んだこともあって輸送手段が全面的に陸送に切り替った。

木材の生産流通面をみると以前は殆どが立木売りであったが、40年代になって森林組合の合併と資本装備の高度化、続いて地域ぐるみ林業を推進するための「龍神林業開発会議」が組織され、啓発普及活動に努め林家の意識向上を図りながら、良質材生産への取り組みがなされてきた。

「苗木づくりから住宅づくりまで」を合言葉に生産～流通～加工～販売の一貫

した取り組みを展開する中で、地域材主産地形成への対応が急速に進展し、村の中では林業が基幹産業としての重要な位置を占めている。

現在では、海布丸太や天然絞丸太の生産、複層林の造成など、短伐期から長伐期までの様々な森林経営の形態が見られる他、サカキの林内栽培による複合経営や高密度路網を取り入れるなど多様な林業経営が見られるようになってきた。

林業振興の母体を設立

昭和30年をピークに人口の急激な減少をみた龍神村では、昭和38年の村長期総合計画に林業を村の基幹産業と位置付けたが、具体的な振興策や実行方法が見つからず、事態はより深刻化していった。昭和44年に、村ぐるみ林業の振興を推進する母体として「龍神村林業開発機構」の設立が提起され、行政―普及指導―森林組合―民間活力が連携協力し、総合的な調整、調停を図り、自らの手で地域林業の振興と活性化に尽力することと、行政は組織の意志を尊重し、計画の実現に全面協力を行うことを課すことにして、昭和45年6月機構を改め、「龍神林業開発会議」が発足した。

その会議規約には、「龍神村の基幹産業である林業の開発・振興を通じて住みよい村づくりの実現を図ることを目標に、村内に所在する林業関係機関及び団体が協議し、理解を深め、団結を強め、その目標達成のための必要な活動の展開と意欲の醸成に努める」こととしている。

住民総意での指導体系を

同会議設立に当たっては龍神林業改良普及所の役割も大きかった。昭和42年には、龍神林業崩壊の逃しに対応するため、担い手となる人材の掘り起こしに奔走するかたわら、従来の個別指導を見直し、住民総意で地域振興を図る指導体系を樹立し、実施に移している。また、44年には龍神林業懇話会を結成、最初の林業組織となった。同じく、村助役より龍神村林業開発協力機構の設立発表があり、この構想に基づき、林業改良指導員は単位組織、林業技術者協会、種苗生産組合などの設立を進めていった。そして、昭和45年6月にこれら各単位組織と村、森林組合、林業改良普及所によつて、新たに「龍神林業開発会議」が発足した。

昭和46年8月、龍神駐在の林業改良指導員は、龍神林業の到達目標を求めるとめ地域の林業後継者を集め山村中堅青年林業教室を2泊3日の合宿で行い、龍神林業の地帯形成はどうあるべきかを主題として、各部門別に果すべき役割をKJ法で集約した。この意見を林業改良指導員が総括的に結論づけ、「苗木づくりから住宅まで林業の輪を広げる」という当時としては飛躍的な到達目標を設定した。

その後、その目標に向けて、森林組合を実行母体として集約的に施設整備を進めていった。現在を見れば順風満帆のごとく感じられるが、もとより利害の異なる人達が対等の立場で討議し旧来を脱皮、新しく地域林業の振興に活路を求めようという試みであっただけに、時には疑心と思惑をはらみ、感情論も生じて危機を感じさせたこともあった。また、会議内部はもとより、施設整備に当っては川上と川下との利害関係、行政段階による振興策（画期的な発想であったための）の違いによる対立、調整の困難さも生じることもあった。しかし、基本的に「村ぐるみ林業の推進と森林組合を核に地域振興へ組織行動する」ことで意思の疎通を図ってきたことが、今日までの活動を支えたゆえんであろう。

「開発会議」は意思決定の場

「龍神林業開発会議」の行う事業内容は、

- (1) 良質材産地形成の推進
- (2) 龍神林業の経営改善
- (3) 林業労務の安定向上
- (4) 林業生産向上
- (5) 林業生産の需給調整
- (6) 龍神林業の振興に関する意見具申
- (7) その他、目的達成に必要な事項、となっている。

具体的な産地形成に必要な活動や施設などの整備、管理は行うことになっていない。同会議は、意思調整の場、意思決定・合意の場であって、具体的な活動は組織している単位組織がその役割に準じて責任をもって実行する、ということを実原則としている。意見の調整、というソフトを常に先行させ、意思の合意をもって施設などのハード事業に取り組む、ということである。

村ぐるみ林業推進が基本

現在、龍神林業は豊富な森林資源を背景に龍神住宅株式会社という住宅産業が頂点となり、森林組合（素材生産）～木材共販所～製材工場～プレカカット工場を基幹的な施設として、間伐材流通センター、ウッドサッシ工場、割箸工場、特産物加工場（いずれも森林組合営）などが整備され、民間の製材工場、木工業と絡みあって地域材の総合供給基地を形成している。

龍神林業開発会議は、村議会、村、林業関係団体（林業技術者、種苗生産、林研グループ、森林組合）、木材加工、建築、固有林、農協の関係者を総括し、利害関係の調整、意見の集約を行い、〈1〉村民総意の場として、森林組合の支援を行い、単位組合による素材市を開設、龍神材ブランドづくりへの一歩とし森林所有者に対し素材市への出荷を啓発してきた。〈2〉先進地調査、各種林業生産技術の講習会開催など林業技術の向上に努め、枝打ち100万本運動の推進、龍神材PR作戦の展開などを行うなど良質材生産地の形成を図ってきた。〈3〉3回の林業振興大会と林業まつりを主催し、また、広報誌『龍神林業』の発行を通じ「村ぐるみ林業振興」を村民の総意として林業立村への気運を盛り上げてきた。〈4〉村民の「村ぐるみ林業振興」の意識高揚を背景に、種々の事業を導入し木材加工場などの新設操業や村内の大型公共建築物の木造化を促進してきた。〈5〉「苗木づくりから住宅づくりまで」という第1段階の到達目標に対し、利害関係を調整し第3セクター方式による龍神住宅株式会社を設立、関係者の職域の拡大、事業量の拡大、村内経済の活性化に大きく寄与してきた。〈6〉今日的課題である林業従事者の後継者の確保問題について「村ぐるみ林業の推進と森林組合を核とした地域振興への組織的行動」を基本に、森林組合での「青年林業士」制度の発足を促すとともに、雇用条件を改善し、月給制による後継者確保の具体策を村に対して提言してきた。

このように、龍神林業開発会議は龍神林業にとって理念的、思想的な支柱であり、地域材の総合供給基地としての仕組みを産んだ「孵卵器」の役割を果たしてきた。龍神林業は、まさしく同会議に裏打ちされた存在であり、同会議の20年の歩みそのものであるといえる。

さらに新組織への脱皮求める

現在の龍神林業は、村を単位とした「林業の総合産業化」を推進してきたばかりではなく、村の各々の産業が有機的に絡み合う「村産業の複合化」への可能性を開き始めている。

今、龍神林業が取り組むべき大きな課題は、〈1〉内に向かっては林業イメージの改革と林業労働問題への対応、〈2〉外に向っては山村の中、山村振興の中、村人の暮らしの中で林業がどこに位置し、機能を果たすべきかを問い、どう演じるかへの対応、をどうするかである。

そのために、〈1〉現在林業のイメージ改革、〈2〉総合産業としての機能強化（ア）システム内各施設及び施設間の機能強化（イ）3次化の促進、〈3〉村産業の複合化、を推進するために、新たな到達目標の設定と、それに対応した龍神林業開発会議の改組、新組織への脱皮を求めていく。